

江都をも砂灰を吹飛しぬる由、古老の物がたりを承り傳えぬ、今も信濃路の驛には、其時落たりし焼石にて、石垣など積たる所有るよしなり、其後百餘年は、此例を聞かず、その時の荒は、いか程のなりしやいざ不知、こだいの咄しは、きくも怖しき事なめり、關所なども崩失せ、何の里、かの村跡方もなくなり、人馬の損亡、万を以て算へがたく、木曾路是が爲に久敷通行なし、たとへば淺間崩し平均して、地形を築たる程に、驛路高く成ぬれども、淺間は却て元よりも高く成たる様に見ゆるとかや、燒出砂石にて、地形堆高くなれるを取捨んとしても、億万の人足を掛ても之を爲さん事難し、其上取捨べき捨所もなし、せん方なく之を引平均ナラして、立毛を植付試みるに、焦土燒砂なれば、作毛一切立たず、亡所數限も無となん。

〔蜘蛛の糸巻〕市中灰降る

天明元年、田沼侯御老職御勝手、同三年關東飢饉、下に其略を記す

同年七月六日、夕七つ半比、西北の方鳴動、諸人肝を冷す、翌七日猶甚しく、江戸中に灰ふる、是淺間山の焼けたるなり、此時おのれ十五歳なり、六日は時ならぬ風吹き、北烈しかりしゆゑ、屋根などに灰のつもりしを、人々灰ともおもはず、風塵とのみ見すごしけるに、六日の夜中、積りし灰を、七日の朝、人々見て愕然せざるはなし、おのれも硯箱の塗ぶたを、物干にしばし出だし置きたるを取りいれ、指頭にて字を書きて試みしに、霜の厚く降りたるが如し、家内うちよりて是を見て、いかなる天變にやといろくに評しけるに、家翁いひけるやう、寶永四年、不二山焼けたる時、江戸に灰のふりしことあり、昨日鳴動したるは西北の方なり、此方に當りて、江戸近き高山は淺間なり、常に燒くる山なれば、おそらくは淺間の大燒ならんといはれけるに、人は玄かりともおもはず、此日は一日往來もまれなり、八日は快晴無風、灰も降らず、諸人安堵しけるにや、往來常の如し、九日の夕方、亡兄の友なりし伊勢町の米問屋丁子屋兵衛門が長男斐太郎とて、千蔭翁の書も